

氏名	なかむら しずこ 中村 静子
学位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲 第25号
学位授与年月日	平成24年3月17日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
論文題目名	玄伯宗旦の研究 —宗旦の侘び茶とその背景—
審査委員	主査 倉澤 行洋 副査 Horst Siegfried Henneman 同 大村 皓一

## 一、論文内容の要旨

本論文が、テーマとして取りあげている元伯宗旦は、千利休を初祖とする千家の三代目である。彼は利休の茶道を継承し、これを後代に伝える上で重要な役割を果たした。しかし彼は利休の茶道をただ猿真似したわけではなく、利休の茶の心に深く分け入り、それをおのが心とすると共に、その心から、彼の時代にふさわしい、また彼のおかれた状況にふさわしい、また彼の個性にふさわしい茶道を行った。いわゆる不易流行である。

この宗旦はいつからか、人々から「侘び宗旦」と称せられるようになった。彼は「侘びの茶」を行う茶人であると同時代のまた後代の人々から考えられたのである。

では宗旦の「侘び茶」とはいかなるものであったのか。本論文はそのことを全篇を貫く根本のテーマとしながら、宗旦研究上の諸問題を多く取り上げ、広い視野から考察したものである。

本論文は、本文六章と「はじめに」、「むすびに」、そして付録の翻刻資料とよりなる。

以下に、まず本論文の目次、ついで各章の、論者自身による要旨を掲げる。

## 目次

はじめに

研究の動機及び背景・目的

研究の方法

第一章 元伯宗旦研究序説

一、宗旦をめぐる従来の研究

二、基礎的な諸資料

三、宗旦活躍時の時代背景

## 第二章 宗旦の生涯をめぐる諸問題

### 一、宗旦の祖父をめぐる諸問題

1. はじめに
2. 宗旦の祖先・宮王家の人々
3. 少庵の父に関する諸説
4. 少庵の父に関する考察
5. 宮王家の血筋と宗旦の茶の湯
6. 茶会に見る宮王家の人々
7. 宗旦と能
8. 謡曲に因んだ銘・形の道具
9. まとめ

### 二、宗旦の母の出自について

1. はじめに
2. 通説による宗旦の母
3. 宗旦の母に関する主な資料
4. 宗旦の母についての主な先行研究
5. 宗旦の母についての諸資料に対する考察
6. まとめ

### 三、道安と少庵との関係

1. はじめに
2. 利休の嫡男 道安
3. 利休と少庵
4. 利休の自刃後の息子たちの所業

5. 茶の湯者道安の復活

6. 利休の道号を尋ねる道安と少庵

7. 少庵の人的交流と茶の湯

8. 宗旦への伝授の仕方

9. 注目すべき道安の記述

10. まとめ

#### 四、宗旦の病氣と經濟状態

1. 宗旦の病氣

2. 經濟状態

3. 宗旦の仕官について

4. まとめ

### 第三章 茶の湯者宗旦形成に係わる要因

#### 一、宗旦と禪との關係

1. はじめに

2. 茶の湯と禪

3. 宗旦と禪

4. 宗旦と大徳寺衆

5. 宗旦辞世の句

6. 宗旦の遺墨と茶杓に見る禪味

7. まとめ

#### 二、宗旦の茶の湯の土台となる利休の茶の湯

1. はじめに

2. 自由都市 堺

3. 利休の茶の湯に見られる創意工夫

4. 利休と秀吉

5. 宗旦と利休の関係

6. まとめ

#### 第四章 宗旦の茶の諸相

一、人的交流に見られる宗旦の茶の湯

1. 東福門院

2. 近衛信尋

3. 近衛尚嗣

4. 鳳林承章

5. 壬生忠利

6. 金森宗和

7. 古市宗也と兼常德庵

二、宗旦の茶室

1. はじめに

2. 利休の茶室を土台とした宗旦の茶室

3. 宗旦の初期の茶室

4. 残月亭

5. 利休聚楽屋敷一畳半・宗旦の不審庵床なし一畳半・今日庵

6. 聚楽屋敷四畳半・不審庵（今日庵）四畳半・又隠

7. まとめ

宗旦ゆかりの茶室

三、茶会記にみられる茶の諸相

1. 『松屋会記』慶長十三年
  2. 『隔蓐記』寛永二十年
  3. 「申ノ茶湯ニ逢申候覚」正保二年
  4. 「申ノ茶湯ニ逢申候覚」正保三年
  5. 「申ノ茶湯ニ逢申候覚」正保四年
  6. 「茶湯参候覚」慶安二年
  7. 『松屋会記』慶安二年
  8. 「茶湯参候覚」慶安二年
  9. 「茶湯参候覚」慶安三年
  10. 「茶湯参候覚」慶安四年
  11. 『茶湯聞塵』慶安四年
  12. 「巳ノ閏六月より茶之湯之覚」承応二年
  13. 「巳ノ閏六月より茶之湯之覚」承応三年
  14. 「巳ノ閏六月より茶之湯之覚」明暦元年
  15. 「巳ノ閏六月より茶之湯之覚」明暦元年
  16. 宗旦茶会のまとめ
- 四、侘びの道具 一閑張
1. はじめに
  2. 一閑張の概要
  3. 一閑張師 飛来一閑
  4. 一閑張師 岸田宗二
  5. 宗旦と二人の一閑張師
  6. まとめ

## 第五章 宗旦の侘び茶

1. はじめに
2. 侘びについて
3. 『本阿弥行伏記』の隠逸の茶人に対する批判
4. 『心の文』にみる藝道の理想の姿
5. 中世藝道者の求めた風体
6. 宗旦の求めた冷え枯れの風体
7. 名人宗旦
8. 宗旦の「軽み」
9. まとめ

## 第六章 宗旦の後継者たち

- 一、宗旦の子供達 三千家成立と宗旦の役割
    1. 閑翁宗拙
    2. 一翁宗守
    3. 江岑宗左
    4. 仙叟宗室
    5. 宗旦の事蹟を引き継ぐ子供達
    6. まとめ
  - 二、宗旦の弟子衆
- 再考 「宗旦四天王」
1. はじめに
  2. 藤村庸軒
  3. 山田宗徧

4. 杉木普齋
5. 三宅亡羊
6. 久須見疎安
7. 松尾宗二

「弟子衆控」にみる宗旦の弟子達

1. 上層町衆
2. 大名の茶堂
3. 町衆
4. 僧侶
5. 弟子達の茶会参会状況

宗旦の弟子衆まとめ  
むすびに  
資料

### 各章の要旨

宗旦は「利休の孫」という観点から、一般的な評価は利休の侘び茶の継承者という立場に留められている。宗旦の生涯は、病気がちで不明な部分が多く、残された資料から全体的な宗旦像を解明することは難しい。しかし少ない資料から垣間見られる宗旦の茶の湯は、唯単に利休の茶の湯を継承することに留まらず、利休の侘び茶を土台として、更に創意、工夫を加えて展開したものと見受けられる。桃山時代に生きた利休と寛永時代の宗旦では時世も異なる。宗旦は時代に則し、且つ独創性のある茶の湯を行っている。

本論文では宗旦の茶の湯を様々な角度から考察し、宗旦の侘び茶が如何なるものであるかを解明する。それと共に宗旦の人間性、茶の湯者宗旦が形成される背景や宗旦の後継者等についても明らかにする。

「研究の方法」としては、基礎資料として『元伯宗旦文書』（宗旦が記した二四〇通に及ぶ自筆の書状）や『江岑宗左茶書』（宗旦の三男が



宗旦から直接見聞きしたことを随流斎の為に書いたもの、『真巖宗見文書』（宗旦の後妻真巖宗見の主に宗左にあてた文書）等を主な資料として使用し、伝承に基づいたものは極力避けることとした。

本論文の構成は、「研究の動機及び背景・目的」、「研究の方法」、「第一章 元伯宗旦研究序説」、「第二章 宗旦の生涯をめぐる諸問題」、「第三章 茶の湯者宗旦形成に係わる要因」、「第四章 宗旦の茶の諸相」、「第五章 宗旦の侘び茶」、「第六章 宗旦の後継者」、「むすびに」、「資料」からなる。

各章の概略は以下の通りである。

「第一章 元伯宗旦研究序説」では「一、宗旦をめぐる従来の研究」として宗旦に関する先学の研究を明確にし、まとめた。「二、基礎的な諸資料」としては、『元伯宗旦文書』、『江岑宗左茶書』、『真巖宗見文書』に加え、『松屋会記』、『天王寺屋会記』、『隔莫記』、『宗湛日記』、『山上宗二記』を主な資料として挙げ、これらの概要をまとめた。

「第二章 宗旦の生涯をめぐる諸問題」では、「一、宗旦の祖父をめぐる」、「二、宗旦の母の出自について」、「三、道安と少庵との関係」、「四、宗旦の病気と経済状態」を取り上げ、通説とは異なる観点から宗旦の真の人物像を明確にすることに務めた。

「一、宗旦の祖父をめぐる」では、宗旦の父である少庵の父親は『四座役者目録』には、宮王三郎鑑氏とするのが一般的であるところ、松屋家の文書には宮王三郎鑑氏の兄宮王太夫の子との記載があるが、考察の結果、少庵の父は宮王三郎鑑氏との結論を得た。しかしここでの重要な点は、宗旦は能の家の血筋を受け継いでおり、源を辿ると世阿弥にまで行き着くことが明らかとなり、その血脈は宗旦の茶の湯に少なからず影響を与えていることが確認出来たことをまとめた。

「二、宗旦の母の出自について」では先学の説を検証し、改めて『千利休由緒書』、『茶道要録』、『敵帯記補』、『おちやう宛利休書状』とその添え状「家原自仙書状への仙叟宗室の勘返状」、堀内家所蔵の「利休画像」の資料を検討した結果、宗旦の母は利休の血筋が繋がっているとは考え難いとの結論を得た。

「三、道安と少庵との関係」では、先妻と後妻の子と言う関係からの軋轢が確認できた。しかし、宗旦は少庵のみならず道安からも茶の湯を教授されていた事実が判明したことをまとめた。

「四、宗旦の病気と経済状態」では、宗旦は長い間気鬱の病に罹っていたことが明らかになったことをまとめた。病気の為に仕官どころで

はない一時期があったとも思われ、手許不如意の時期も長く経験したようである。しかし、仕官しなかった理由としては、利休の轍を踏まないように宮仕えを拒むという考えと、寧ろそれ以上に、自身の理想の茶の湯を追い求める為という積極的な発想に由来するとの考えを明らかにした。

「第三章 茶の湯者宗旦形成に係わる要因」では「一、宗旦と禅との関係」、「二、宗旦と利休の茶の湯との関係」を取り上げた。

「一、宗旦と禅との関係」では、宗旦の人間形成、延いては茶の湯者宗旦の形成には「禅」の修行が不可欠であったことを確認した。宗旦の凡慮を離れた侘び茶は長年に亘る禅の修行により培われた賜物である。又、大徳寺との関係から多くの知己を得ることが出来、その人脈は、宗旦の人生の大きな宝となっている。大徳寺の仲間は宗旦が子供達の有付に奔走する時、共に茶の湯を楽しむ時、宗旦が死を間近に感じた時等にも大きな心の支えとなっていることを確認してまとめた。

「二、宗旦と利休の茶の湯との関係」では、利休との短い交流の間に、茶の湯に関する多くの教えを受けたことや、孫として可愛がられていた様子を確認した。これ等は宗旦にとり強い印象を伴い、心の奥底に忘れられない出来事として刻まれた。宗旦は但単に利休の茶の湯を真似ることに留まったわけでは無く、利休の侘び茶を土台として更なる工夫、創意によって宗旦独自の侘び茶を形成していることが確認出来た。

「第四章 宗旦の茶の諸相」では宗旦の茶風を人的交流、茶室、茶会記、茶道具から明らかにした。

「一、人的交流に見られる宗旦の茶の湯」では、東福門院、近衛信尋、近衛尚嗣、鳳林承章、壬生忠利、金森宗和、弟子で大名茶堂の古市宗也と兼常徳庵を例に挙げ、これ等の人々との交流に見られる宗旦の茶の湯を考察した。

東福門院との関係に於いては「爪紅台子」などの雅な好み物が生まれたが、これは宗旦の東福門院に対する敬慕の念から好まれたものと考えた。

近衛信尋、尚嗣親子との関係からは、貴顕の格にあった茶の湯と共に、宗旦の侘び茶も伝授していたことが窺えた。近衛家には千家と同じ三畳台目の席があり、小座敷の茶の湯に対する珍しさもあつての造立と考えられた。

鳳林承章とは身分を超えた肝胆相照らす関係も窺えた。又、『隔蓑記』には宗旦の「菓子茶」の記載が度々見られ、宗旦の茶の湯の実態を詳細に確認することが出来た。

地下である壬生忠利と宗旦は師弟関係にあり、忠利の日記である『忠利宿禰記』からは、「利休の孫」として権威付けられ、宗旦の箱書き

や宗旦作の道具が喜ばれ、贈答品などにも使用された姿が窺えた。

金森宗和との関係では、宗旦が宗和をうそつき呼ばわりしている姿が見られる。宗旦と宗和は同時期に京で活躍した茶人であるが、茶風も異なる所から相反する考えが生れたと考えられた。

宗旦の弟子で大名茶堂の古市宗也と兼常徳庵は、宗旦から大名家の茶堂に必要な茶の湯を伝授されて活躍している様子が窺えた。特に兼常徳庵に対しては勘返状の遣り取りと言う、通信教育さながらの方法で茶の湯を教授している姿が窺えた。しかし徳庵にとり最も重要なことは、宗旦のお墨付きを得ることにあった事実が勘返状の記述から確認出来た。

「二、宗旦の茶室」では宗旦の茶室の変遷を考察した。更に、利休が理想とした一畳半と四畳半に着目して、一畳半では「利休聚楽屋敷一畳半」「宗旦の不審庵床なし一畳半」「今日庵」、四畳半では「利休聚楽屋敷四畳半」「不審庵（今日庵）四畳半」「又隠」と言う様に、利休と宗旦の茶室を対比することで宗旦の創意、工夫を明らかにした。

「三、茶会記にみられる茶の諸相」としては、『江岑宗左茶書』の「申ノ茶湯ニ逢申候覚」、「茶湯参候覚」、「巳ノ閏六月より茶之湯之覚」や『松屋会記』『隔莫記』『茶湯聞塵』を参考にして、宗旦の茶会の形式、懐石、道具組、客組等に着目し、宗旦の茶の湯に対する理念を明確にした。茶会の形式としては、弟子達にも「飯後軒」の号を与えた様に、飯後の茶の湯が多く、菓子のみ茶の湯も多い。懐石も基本的には簡素である。道具組に関しても手許にある道具を使うと言うように、道具に拘泥しない考えである。『江岑宗左茶書』の茶会記に見られる宗旦晩年の客組は、身内や気の置けない仲間や弟子で占められていた。このように茶会記の考察からは、宗旦の侘び茶の実態を明確にすることが出来た。

「四、宗旦の茶道具」では、宗旦の代表的な茶道具として一閑張を取り上げた。一閑張の持つ素朴な風合いと、宗旦の侘び茶の相性の良さが確認できた。又、宗旦の一閑張の製作者は飛来一閑だけではなく、岸田宗二という人物も係わっていたことが確認できた。

「第五章 宗旦の侘び茶」では「侘び」の概念を明確にすることに務め、宗旦と栗田口善法等の他の隠逸の侘び茶人の茶風との違いから、宗旦の追い求めた侘び茶の湯の姿を明らかにした。これにより宗旦の侘び茶は他の侘び茶人達と異なり、長年の禅の修行で培われた「深き心」を持つて為されており、一段と高い境地の侘び茶であることが確認できた。更に、宗旦が同時代や後世の人々から「名人」、「離」格の茶の湯者と目されていることを検証し、宗旦が凡慮を離れた優れた茶の湯者であったことを再確認したことをまとめた。

「第六章 宗旦の後継者」では、「一、宗旦の子供達」として、宗旦と閑翁宗拙、一翁宗守、江岑宗左、仙叟宗室との関係を考察した。子供達の有付に関しては子を思う親としての宗旦の前面に現れ、人間味あふれる宗旦の姿が確認出来た。

宗旦の没後は一翁宗守、江岑宗左、仙叟宗室が宗旦の事蹟を受け継ぐが、その過程も明らかにした。「二、宗旦の弟子衆」では、「宗旦四天王」として名前が挙げられる藤村庸軒、山田宗徧、杉木普斎、三宅亡羊、久須見疎安、松尾宗一との交流を明らかにし、「宗旦四天王」の人選について考察した。更に「弟子衆控」に宗旦の弟子として名前が挙がる人物の内、代表的な弟子と目される人物について考察を加えた。その結果、宗旦の弟子は上層町衆、大名の茶堂、町人、僧侶など広範囲に亘ることが明らかになった。

「むすびに」では、この研究を通して、従来の宗旦研究では明らかにされなかった事柄に、新たな光を当てることが出来た点について述べた。特に、宗旦の生涯をめぐる諸問題として取り上げた疑問に対しては、それぞれ明確な答えを出せたと考える。

他にも、今までの宗旦研究で明らかにされなかった部分が解明された点として、東福門院から賜った御用が『真巖宗見文書』に記されている内容と合致出来たこと、『忠利宿禰記』の翻刻には多くの時間を費やしたが、その労力に余りある貴重な新事実を確認することが出来たこと、一閑張師が二名存在したことや調査を進める段階で宗旦が一閑に贈った「飯後軒」の扁額と極め書が個人の蔵品として現存していることも判明し、貴重な新資料として本論文に掲載を許可していただくことが出来たことなども挙げられる。

又、宗旦の研究を通して、宗旦の侘び茶が従来唱えられてきた以上に奥深く、意義のあるものとの認識を得たことは大きな収穫であった。現代の茶道は姿や形に囚われがちで、心を大切にしたい宗旦の侘び茶とは隔絶の感がある。現代は茶道本来の心が失われている時代と言っても過言ではない。このような時代であるからこそ、宗旦の侘び茶の心を学び、茶道の本質がどうあるべきか改めて検証すべきであることに気づかされた。

宗旦の侘び茶は、伝統藝術を次世代に伝承する者にとり、多くの課題に対して方向を示してくれる羅針盤のような存在であると考えられる。

「資料」として、『忠利宿禰記』の宗旦に関する部分の翻刻と『茶湯聞塵』の概要一覧を付載した。『忠利宿禰記』（宮内庁書陵部蔵）（未翻刻）は宗旦の弟子である壬生忠利の日記である。断片的ではあるが宗旦の茶の宗匠としての姿、忠利の侘び茶の受容がつぶさに確認出来る。『茶湯聞塵』（陽明文庫蔵）は近衛尚嗣によって認められた備忘録である。その内容を整理して一覧表を作成し検証したところ「宗旦の説」の多さを改めて確認することが出来た。

尚嗣が宗旦に対して如何に厚い信頼を寄せていたかを窺うことが出来る資料である。

## 二、本論文の評価さるべき特色

本論文を大観してまず驚かされるのは、整然と組み立てられた見事な構成である。先ず「はじめに」において、研究の動機及び背景、目的と研究の方法を述べ、第一章で先行研究、諸資料、時代背景について、第二章で宗旦の生涯をめぐる諸問題について、第三章で宗旦の茶の湯形成の土台となった禅と利休の茶の湯について述べる。そして第四章では宗旦と交流のあった人々、宗旦の茶室、茶会記に現れる宗旦使用の道具などによって、宗旦の茶の諸相を述べ、第五章で宗旦の侘び茶の根本特質を語る。そして最後に宗旦の後継者たちについて述べる。各節の最後には必ず「まとめ」が置かれ、論文全体の最後には「むすび」が置かれる。論文作成のお手本の如き見事さである。

しかし言わずもがなのことであるが、形成の整っていることをもって直ちにいき論文とすることはできない。内容が問題である。しからば本論文の場合はいかがであるか。

先に論文構成の見事さを言ったが、内容もまた見事である。そのいくつかの点をあげてみよう。

① 利休の妻宗恩は、利休の後妻となる前に能の名家宮王家に嫁し、そこで後の少庵を生んだ。この少庵が宗旦の父であることについて異論は少ないが、宗旦の母が誰であるかについては、かましい論議がわれてきた。問題の焦点は、宗旦の母は「利休の娘のお亀」であるか否かというところにあった。もしそうであるならば宗旦は利休の血筋に入るが、そうでない場合、千家には利休の血は入っていないことになる。このことが厳正であるべき学問的検討の中に希望的観測を入り交らせることになり、議論の混乱に拍車をかけていた。論者はこの問題について、多くの説、多くの資料を精細に検証した結果、お亀は利休と血のつながった娘ではあるが、宗旦の母ではなく、少庵の父親違いの妹であると結論つけた。

② 宗旦が好んだ茶道具に一閑張りがある。論者はこれを調査し、宗旦と関りを持った一閑張り師が二人いた（飛来一閑と岸田宗二）ことを確証した。

③ 右の調査の過程で宗旦筆「飯後軒」の扁額を発見し、これを本論文中に写真入りで紹介した。「飯後」は飯後の茶事すなわち食事を伴わない茶事で、侘び茶人にふさわしい茶会の形式である。宗旦もこの形式の茶会を多く催したことを論者は調査によって明らかにした。

④ 宗旦の侘び茶については論者自身によって語らせることとしよう。

宗旦の侘び茶についての考察では、「侘び」の概念を明確にし、宗旦と栗田口善法等の他の隠逸の侘び茶人の茶風との違いから、宗旦の追い求めた侘び茶を明らかにした。これにより宗旦の侘び茶は他の侘び茶人達と異なり、長年の禪の修行で培われた「深き心」を持って為されておられ、一段と高い境地の茶の湯であることが確認できた。

⑤ この研究は現代の茶の湯に対する的確な批判に繋がった。これも論者自身によって語らせることにしよう。

宗旦の侘び茶を研究することで、茶の湯の本来あるべき姿が鮮明になった。それと同時に現代行われている茶道は、本来の目的である心を磨くことを蔑ろにしていることに気づかされた。現代の茶道は姿や形に囚われ、表面的にも華美に流れがちであり、心を大切にされた宗旦の侘び茶とは隔絶の感がある。

正に茶道本来の心が失われ、抜け殻のような茶道となっていると言っても過言ではない。

### 三、残された課題

これについても、論者自身に語らせることとしよう。

茶道は日本を代表する藝道である。本来、藝道は深い精神性に培われたものであり、欧米の人々にも憧憬の念を持たれ、その根本精神は高い評価を得ている。現代に生き茶の湯に親しむ者は、宗旦の茶の湯を学び、深き心の実践の場である茶道の姿に立ち返る必要性がある。茶道に対する正しい認識が後世への正しい継承に繋がり、深き心から繰り出される茶道の姿を世界に知らしめることにもなる。

### 四、審査結果の要旨

本委員会は、以上の如き観点から、本論文を、着想の独創性、叙述の仕方、構成の整合性などにわたって慎重に審査した結果、全員の一致をもって、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。